



地域日本語支援ニュース こだま 第 405 号

2021.7.8



★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部: <https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html>

==== 目次 =====

1 ■ともに生きる■

ミャンマー民主化を考える

～多文化社会研究会主催多文化共創フォーラムより～(報告:AJALT 小形)

2 ■AJALT からのお知らせ■

AJALT の著作教材を活用した

「日本語教師のための教え方講習会」開催のお知らせ

3 ■進学進路ガイダンス情報 (7 月、8 月) ■

=====

1 ■ともに生きる■

今年 2 月 1 日、民主化が進むミャンマーで突然軍によるクーデターが起きました。以来各地で続く市民と軍との衝突は収まることなく、国際社会の問題に発展しています。「こだま」のお知らせにも掲載しています通り、政府(出入国在留管理庁)は、日本に住むミャンマー出身者に対して緊急避難措置をとり、報道によると 6 月半ばまでに約 50 人が新たな在留資格を得たということです。このような状況下において皆様に以下のご報告をしたいと思います。

去る 5 月 15 日に多文化社会研究会(注 1)は、ミャンマー難民で、本研究会の理事のチョウチョウソーさん(注 2)からのお話「ミャンマー民主化を考える」をテーマに第 168 回多文化共創フォーラムを開き、AJALT は事務局を担当しました。

チョウチョウソーさんは、現地のミャンマー情勢、また在日ミャンマー人の活動や思いをお話してくださいました。

.....

ミャンマー民主化を考える

～多文化社会研究会主催多文化共創フォーラムより～

(報告：AJALT 小形)

◆考えるきっかけ

本フォーラムの企画班の一人である関口(AJALT 理事長)が最初の挨拶をし、このフォーラムの趣旨を説明しました。次にチョウチョウソーさんと長年のお付き合いがあり、本フォーラムの提案者である藤巻秀樹氏(元日経新聞編集委員)から、ミャンマーの最近の動きについてご説明がありました。

2020 年 11 月に行われた総選挙でアウン・サン・スーチー氏率いる国民民主連盟(NLD)が圧勝したことに対して、軍は選挙の不正を主張してクーデターを起こしました。スーチー氏らを自宅軟禁にして政権を掌握する軍に対する市民による抗議デモ、軍と民主派の衝突、国際社会の動きについて、主だった事項を時系列に示されました。

それに続けて次のように話されました。

「とても印象に残っているチョウチョウソーさんの言葉があります。東日本大震災の時、彼はいち早くミャンマーの仲間を集めて被災地にボランティアに行きました。被災者にミャンマーの人がいないのにどうしてかと問われると、困っている人がいたら助けるのは当たり前、日本社会の一員ですから、と答えました。今ミャンマーが大変なことになっています。今度は私たち日本人が助ける番です。何ができるのか、今日のフォーラムはそれを考えるきっかけにしたいと思います。」

◆国際社会へのアピール

チョウチョウソーさんは市民が撮った多くの写真を使って、状況を解説していきました。

「2月1日夜8時、国民は鍋やフライパンを叩きました。悪いものを追い出す古くからある風習です。今も人々はずっと続けています。女子サッカーチームによる抗議や市民の抗議デモでは、Tシャツやプラカード、横断幕に、英語で抗議の言葉を書いています。これは国で何が起きているのか世界に知ってほしいという、若い人を中心とした人々による国際社会へ向けた大きなアピールとなっています。若者だけでなく、医者や看護師、学校の先生も参加し、みな国の将来を考えて自分たちができることで反対の意思を表現しています。このように、英語や目立つデザインを使って国際社会にアピールする抗議の仕方は今までにない方法です。」

「指三本を立てるポーズは、クーデターの拒否、総選挙の結果を守ること、拘束されたリーダー達の解放を意味します。市民は願いを込めて、三本の指を立てて互いに挨拶をします。また川に願いを書いて流すのは日本の伝統文化にも似ています。」

「人々は SNS に様々な写真をあげて世界に発信しています。これにより市民に銃を向け暴力による弾圧をする軍の様子もすぐに世界に広まりました。大都市だけでなく田舎でも同じです。バイクに乗って抗議デモをし、女性が売りもののスイカを配って応援する様子、目の前で銃に撃たれた友人を、危険を冒して助けに行く様子、すべて写真が物語っています。」

◆日本から祖国のために

「一方、日本には今、留学生、技能実習生など多くの若いミャンマー人がいます。彼らは 2011 年に民主主義政権が誕生して以来、自由の中で育ち、夢にあふれている若者です。彼らもまた、英語や日本語のプラカードを持ってデモ行進をし、駅前でビラを配り、日本の人達に状況を知ってもらいたいと活動を起こしています。」

「少数民族の参加も見られます。日本政府が 10 年間変わらずミャンマーにサポートをしてくれていることへの感謝と期待、現状を訴える気持ちは高まります。」

「東京周辺ばかりでなく、名古屋、静岡、福岡、高知、群馬、北海道、沖縄と全国にたくさんの技能実習生がいます。若い人たちは、決して祖国のことをあきらめません。」

◆コロナ禍で

「ミャンマーでは、困っている人のために米や油、魚などの食料を寄付する習慣があります。今まではそれらをただ配っていました。今は貧しい人たちも、自分たちが必要な分だけを取りそれで足りるとする、そういう社会に変化してきています。」

「コロナ禍で国民の収入も減り、生活は厳しくなりました。6月にサイクロンの季節に入ると、状況はますます厳しくなる一方です。大変な時期をどこまで我慢して抵抗を続けられるのか、また学校を再開できるか、ワクチンはどうなるか、今政治問題ばかりでなく、社会、経済の問題も大変議論になっている状況です。」

プレゼンテーションの後、藤巻氏との対談、また参加者との質疑応答が続きました。デジタル機器に長け SNS を駆使する Z 世代は、今までと違った情報発信の方法で、決してあきらめない強い気持ちを持ち続けて行動しています。

チョウチョウソーさんたち親世代は、そこに頼もしさを感じながらも、心配なことも多く、現実を見守り、祈り、活動し続けているのです。最後に赤石留美子氏（明治学院大学教授）の心温まるご挨拶で終了しました。

ミャンマーが一日も早く平和になることを祈りつつ報告を終えます。

（注1）多文化社会研究会：1989年に設立された組織 理事長川村千鶴子氏（大東文化大学名誉教授）

<https://tabunkaken.com/about/>

参考：<https://tabunkaken.com/>

『多文化社会研究会ニューズレター』（本フォーラム記事は168号）

（注2）チョウチョウソーさん：1991年に来日、1998年に難民認定を受ける。妻を呼び寄せ、高田馬場でミャンマー料理店を開きながら、祖国の人々のための活動を続けている。現在、特定非営利活動法人「ミャンマー日本教育のかけはし協会」理事長、NHK国際放送「ラジオ日本」ビルマ語アナウンサー。
